

わり果てた姿で降り立ち、家路に向かう二人に、「ご苦労さまでしたね」と、温かい言葉で迎えてくれた人々に、無事に帰った喜びをしみじみと感じたものでした。

私たちの姿を見付けた父は、飛び上がらんばかりに喜びました。「ただいま帰りました」という言葉さえ途切れ途切れで、涙が先に流れるばかりでした。

七 引揚げ後の生活

毎日、喜びの涙に暮れる父と気丈夫な母に支えられて、健康も回復しました。母は体が大事だからゆっくり静養してから仕事をしなさいと言ってくれましたが、人生再出発ですから休んではいられません。食糧の無い時代なので、畑仕事から始めました。そのうちに食糧の買い出し、着物教室と順調に進みました。

二年後には食堂経営を始めましたが、子供たちの教育上の問題もあり、昭和四十年に上京しました。私は、日本伝統の美である和服を教えて頑張りました。

平和の中におりますと、苦労したことを懐かしく感じますが、再び東北地方（旧満州）に行きたいとは思

いません。しかし、佳木斯での苦しかったときに親切にしていただいた、満拓のボーイさんとその娘さんには、お会いして心からお礼をしたいと思えます。私の真剣な気持ちにボーイさん一家に伝わってほしいと祈ると共に、温かい厚意に対しまして心から深く深く感謝をする気持ちでいっぱいです。

私の生きた七十四年

富山県 山本 祥作

私は、大正十四（一九二五）年五月七日、富山県射水郡佐野村（現在の高岡市西佐野）で、父佐七郎と母ちよとの四男として生まれた。五月といえは農繁期の真ただ中で、農家にとっては最も忙しい時期であった。昭和七年三月、私が小学二年生のときに母が亡くなったが、父はその後再婚して、私たちは兄弟姉妹八人になった。

昭和十五年、私が尋常高等小学校の高等科二年のと

きには、父は佐野村の生産組合長を務めていた。私の卒業が間近になったある夜、薄暗い裸電球のともる囲炉裏端で、家族そろっての夕食が終わると、父が、皆に相談があると話し始めた。「今、日本の重要な国策の一つとして満州国の建設がある。そのためにこの大陸の新天地で活躍する満蒙開拓青少年義勇軍の隊員を募集している。家には六人もの男の子がいるのだから、だれか一人でも義勇軍に応募して国策にそって欲しいものだ」という話であった。

そのころ学校でも青少年義勇軍の参加募集を行っていたので、義勇軍のことはおぼろげながら知っていた。だれと名指して言ったわけでは無いが、父の「だれか一人でも！」の言葉を聞き、お国のためになることでもあるし、子供心にも、大勢の子供を育てている両親の苦勞を考えて、親元を離れるとか、遠い未開の地へ行くとか、いろいろな不安はあったが、それを振り切って卒業直前に義勇軍に応募した。

昭和十五年三月二十五日、いよいよ出発の日がきた。近所の家々にあいさつ回りを済ませたあと、村の

神社で出征兵士と全く同様な壮行式典が行われた。当年とって十四歳で、「緞の豆戦士」として村を挙げての盛大な見送りを受け、誇らしい気持ちいっぱいとなって生まれ故郷を後にした。だが、見送りの人々の中には、「あんな小さな子供が、よくもまあ遠い満州まで行くねえ」とか、「母親がいればねえ」などときさやいている声があり、それが耳に入ったが、私は、「何くそ！ 何が何でも頑張るぞ！」という気持ちになつていたのであった。

翌日の二十六日に、茨城県内原にあった満蒙開拓義勇軍の内原訓練所に入所した。内原訓練所は、満蒙開拓者養成が目的で設立されていた。今思えば、第一に、どんな苦しい場面に出合ってもくじけない強靱な精神と身体を養うための教育が重視されていた。開拓の父として称賛され、敬慕されていた加藤完治所長が、「農の意義を明確に悟り、衣・食・住の生産に努力するのは美である」と、訓練生に教え諭された熱意あふれる精神訓話は、今になっても耳に残っている。

第二は、精神教育に並行して行われた特技訓練であ

る。これは満州に渡ってからの生活や村作りに必要なもので、昼夜の区別もなく二十四時間ぶっ通しで行われた。一つの動作が繰り返して行われ、どんな困難な状況下にあっても迅速確実にできるまで徹底的にたたき込まれた。そんな激しい訓練でくたくたになっても、夜間には、消灯後に二人一組で一時間交替の不寝番勤務が、三日に一度は回ってきた。三月とはいえ内原訓練所の夜は寒い。不寝番勤務が終わって床に入っても、冷え切った身体はなかなか温まらず、起床時間まで寝付けないことも度々であった。

入所後日がたつにつれて、訓練の内容は現地の治安状況に応じたものが行われるようになり、特に匪賊に対処するための戦闘訓練が主体になってきた。

一個中隊の編成人数は約三百人であった。通常は、入所してから二、三カ月で編成が完了して渡満していたのであるが、我々の中隊は、富山県に割り当てられていた訓練生的人数が目標に達しなかったため、五カ月の間、内原で訓練を受ける結果になってしまった。

やがて不足していた訓練生の数もそろって、出発予定日が決まり、入所以来、共に訓練に励んできた群馬県出身者六十五人と共に、いよいよ渡満の準備に取り掛かることになった。

予防注射を五、六種類も打たれたり、満州で着用する制服、下着などの衣類そして靴などが次々に支給された。これらの被服類はすべて新品で、制帽の桜の記章がびかびかに光ってまぶしかった。

これでいよいよ義勇軍の一員になれたんだと、面はゆく思うと同時に、身の引き締まる思いであった。

昭和十五年八月二十二日、いよいよ内原訓練所を出発する日があった。朝、いつもより早く起き出した。みんなは、はつらつとした顔をしていて、てきぱきと動作をしていたが、やがて集合ラッパを合図に訓練所の広場に集合した。

川原中隊二百八十二人全員が、支給された桜の記章輝く制帽をかぶり、国防色の制服を身にまとい、巻脚絆をりりしく締め上げて整列した。

正面の来賓席には、各界の名士がきら星の如くに並

んでいた。隊員一同の緊張は、ますます高まっていた。隊員一同の緊張は、ますます高まっていた。

やがて盛大な壮行式が開始されて、若い義勇軍の前途を祝福する数々の祝辞が述べられた。

最後に所長の加藤完治先生から、「よく眠り、食事には十分に注意し、健康に気を付けること。心を合わせて事に当たり、義勇軍の使命を自覚して行動すること」との訓示があった。

訓示が終わって分列行進に移った。まず先頭に日満の両国旗。次に川原中隊長、続いてラッパと鼓笛隊、そしてその後に、銃の代わりに真新しい白木の楯の柄を担った訓練生が、胸を張り足並みをそろえて歩武堂々の行進を行った。

こうして壮行式も無事終了して、内原訓練所を後にし内原駅から東京に向かって出発した。

川原中隊の若い開拓の豆戦士たちは、道中「植民の歌」や「我らは若き義勇軍」など開拓の歌を声高らかに何回も何回も歌って、志気ますますあがり、その行進はまさに勇ましいかぎりであった。

東京駅到着後、隊列を整え、ラッパ・鼓笛隊を先頭に皇居広場に前進、二重橋前広場で皇居を遙拝して万歳を三唱し、渡満、開拓成就の決意を固めた。続いて靖国神社に参拝した後、夜行列車の時刻まで青山会館で休憩した。

夜、東京駅をたち、翌二十三日の朝、宇治山田駅に到着して、伊勢神宮を参拝して再び渡満を報告して神々の御加護を祈り、さらに夜行列車で郷里高岡駅に向かった。

二十四日朝、高岡駅に到着したが、駅頭には肉親、知人をはじめたくさんの市民が出迎えてくれた。ここでも壮行式に参列するため、式場である高岡古城公園本丸広場に向かって市中行進を始めた。我々は車道を行進したが、駅に出迎えてくれた肉親や知人そして住民の人々は、歩道を隊列と一緒に歩いた。一緒に歩いていると、入所以来の訓練や作業の楽しかったこと、苦しかったことなどが思い出され、また、これから行く現地でうまくやっついていけるのかと不安になったり、いや、見送ってくれている人々のためにもしっかりや

らなければならぬなどと思い巡らせていた。その一歩一歩に込み上げてくる感激は、戦後五十四年を経過した今でも忘れることができず、涙の出る思いである。

翌二十五日、水見線に乗り伏木港へと向かった。下車した伏木駅でも見送りの人たちによって歓送会が催された。温かい赤飯の昼食を済ませた後、伏木港に停泊していた「射水丸」(三千トン級貨物船)に次々と乗船した。本土との別れである。投げられた五色のテープを、行く者、見送る者が共に持ち合い、別れを惜しんでいた。出帆の合図の汽笛が響く中を、船は見る見るうちに岸壁を離れ、見送りにきていた親せき、友人、知人が「頑張れ！ 頑張れ！ 身体に気をつけてな！」と、涙ながらに叫ぶ声を聞いて、私たちも感涙にむせびながら手を振って別れを惜しんだ。船はだんだんと遠ざかり、見送る人たちの励ましの声も届かなくなり、その姿もはるかに遠く小さくなっていった。

生まれて初めての船旅である。やがて本土の陸地も

見えなくなり、水平線が丸みを帯びて見え、地球は丸いという実感がわいてきた。夜になって、海が荒れ波が高くなった。船も横に揺れ始め、あなた、こなたで自分の悪くなる者が出てきた。「ゲージャー」やる者もいる。私も少し気分が悪くなってきた。

周りに何も見えないしけの海での二日間が過ぎた。三日目には朝鮮半島が見えてきた。そのころにはや々と船の揺れにも慣れてみんな元気になっていた。

船は清津に寄港し、それから羅津港に向かった。羅津港で上陸し、夢にまで見た大陸への第一歩を踏み出したのである。羅津で一夜を明かし、翌朝の列車で目的地、「対店」へと向かった。

北上する列車の窓から見える大陸は、ただただ広大で殺風景であった。列車の座席は、日本のものより幅が広く三人がゆったり掛けられたが、速度は遅く、汽笛の代わりに鐘を「カンカン」と鳴らして走っていた。牡丹江を過ぎハルビン駅に着くと、馬にまたがった伊藤博文公や肉弾三勇士の銅像があるのには驚いた。

列車はさらに北上を続けて北安省に入った。一望千里、広漠とした大草原が続き、野鹿の群れが飛び交い、きれいな野草の花が何十キロメートルにもわたって見事に咲き競っていた。現地人の部落も視界に入ってきた。土で作った塼、草ぶきで軒の低い住居があちこちに見えてきて、満州らしい風景となった。

ハルビンから八時間余り北上して、終着駅クイフの海倫駅に着いた。迎えにきていたトラックに乗って、これから三年間教育を受ける「対店訓練所」に着いたのは、昭和十五年九月一日であった。

北満の地、対店訓練所は既に冬の季節で、夜、暖房のない部屋の冷え込みは激しく、リュックサックに詰めて持ってきた毛布一枚ではなかなか眠れなかった。中には二人で抱き合って寝る者もいた。

対店訓練所入所時の訓練は内原での訓練とほぼ同様であったが、こちらでは満州語の教育もあった。夜は衛兵勤務があり、冬、気温が零下三十―四十度にまで冷え込むときの立哨勤務は、非常につらいものであった。重い防寒外套を身にまとい、防寒帽の中から目だ

けを出しているが、吐く息でまつ毛も鼻毛も凍って白い花が咲いたようになる。しかし、いつ匪賊に襲われるか分らないので緊張の連続である。とにかく一時間の立哨勤務がものすごく長く感じられた。時間がたつて、交替の勤務者の近づいて来るのが見えると、ほっとして生き返ったような気持ちになったのである。

そうこうするうちに、渡満して初めての正月がやってきた。日ごろから代わり映えない食事に飽きていたこともあってか、正月の餅つきは何にも増して楽しく、みんなでつきあげた餅の味は、故郷を思い出してまた格別の味であった。

正月休みが過ぎたころからシラミがわきだし、体中がかゆくなつて実に嫌な気分である。下着類をマイナス四十度の酷寒にさらしても、それを着て夜寝床に潜ると、また動き出すのには驚いた。

便所では、大便が便槽に落ちたとたんに凍るので、竹の子状に次々と盛り上がり糞の柱ができる。便所当番がつるはしで叩き割ってモッコに乗せて畑へ運搬す

るのであるが、割ったときに飛んでくる糞のかげらが作業服に付着して、室内に入って溶けだし、ぶんぶんと臭いにおいを発散して往生したものである。また、春になって気温が上がってくると、畑にまいた糞や現地人の家の周辺の大小便が溶け出してきて、辺り一面に臭気を発散する始末であったが、それがちょうど一斉に農作業を始めるときで、畑を耕したり種をまいたりの季節であった。

大陸では春や秋の季節がほとんど無く、冬からすぐに夏になり、少し寒くなったと思うとすぐに冬の到来である。農耕作業の期間は短く、夏の終わりには急いで収穫に入らなければならないのである。

対店訓練所の第一年に困ったことがあった。愚連隊のような訓練生がいたことである。夜中、我々が寝静まったころになると宿舎に入ってきて、ランプを割ったり、注意すると木刀で殴るなど、手に負えない連中であった。軍隊でいえば、二年兵に当たる第一次義勇隊の先輩訓練生であった。

私たちが内原訓練所に入所し訓練を終えて満州の訓

練所に移るまでは、「満蒙開拓青少年義勇軍」であったが、対店訓練所にきてからは「満蒙開拓青少年義勇隊」と呼称が変わった。これは当時の関東軍が「軍」という呼び方は不穏当と横槍を入れたためであり、満州では私たちも義勇隊と言っていた。

第二年次の昭和十六年八月に、満州全土で関東軍の特別大演習、即ち「関特演」が実施され、我々義勇隊の訓練生も軍事奉仕作業に駆り出された。訓練所では、秋の採り入れの始まる忙しい時期であった。

その年の十二月九日、零下二十五、六度の寒い朝であったが、各小隊に集合命令が出されて全員が講堂に集まった。川原中隊長が緊張の面もちで、昨十二月八日に日本が米英に宣戦布告した旨の「ニュース」を伝えられた。中隊の中では、一挙に緊張感がみなぎり、その後は警備の態勢も一段と厳しさを増した。

昭和十七年、第三年次の春ごろには、大東亜戦争もますます激しくなり、食糧の増産が叫ばれる中で農作物の種まきが始まった。二カ年間の訓練と経験の積み重ねにより、畑仕事は効率よく進み、作物の生育もす

こぶる順調であった。収穫の終わるころになると、来年の開拓団への移行についての話題が飛び交うようになった。

昭和十八年四月、無事に対店訓練所での三年間の教育訓練を終えて、浜江省五常県南沖河に入植することが決まった。川原中隊長から、「開拓団の名称は、富山県の神通川の『神』と、群馬県利根川の『利』をとって『神利義勇隊開拓団』と名付ける」と発表された。

この地区は、面積二万七千町歩余りの開拓団建設予定地で、我々が渡満した昭和十五年に富山県の東礪波郡・西礪波郡の人たちが入植した第九次沖河礪波開拓地に隣接している。南北に長く、中央部に川が流れていて、その流域一帯は肥沃で水稲作りにも適している、王道楽土の開拓団建設には最も有望な場所であるとされていた。

昭和十九年、二十年ごろになると大東亜戦争もだんだんと不利な情勢になって、徴兵検査も一年繰り上げとなり、開拓に生涯の夢をかけていた働き盛りの青年

たちが、根こそぎ動員で召集されてしまう状況になり、私も嫩江の部隊に入隊した。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が突如としてソ満国境の各地から侵攻し、各開拓団で働き手の出征の留守を守って、「五族協和」「王道楽土」の建設を夢に見て日夜励んでいる老人、婦女子たちをも戦禍に巻き込んでしまい、その夢を無残にも打ち壊した無念の思いは今日も忘れることができない。

昭和二十年八月十五日、大日本帝国は連合軍に降伏し終戦を迎えることになったことを大隊長から告げられ、将校も兵隊もみんな涙に暮れた。しかし、心のどこかには、まだ負けてはいないという気持ちが残っていた。だが八月十七日の朝、起きてみると、ソ連軍の戦車が我々の部隊を取り囲んでいた。そしてその砲塔はすべて我々に向けられていた。午後一時ごろであったか、ソ連軍から「連合軍の命により日本軍を武装解除する」という指示があり、すべての武器・弾薬が接収された。各兵士が持っていた三八式歩兵銃を、一人一人、ソ連兵に差し出したが、ソ連兵は、「おそれ多

くも菊の御紋章の刻まれた小銃」を、まるで鉄くずでも捨てるように放り投げて山積みにした。それを目の当たりにしたときに、初めて私は大日本帝国の敗戦を実感し、胸のうちに何かが込み上げてきた。この思いは、戦後五十四年たった今も、いまだに忘れることができないのである。

それから半月余りして、日本に帰国するとのことで嫩江の部隊を出発したが、期待とは裏腹に部隊は北方に向かい、野宿を続けての四日三晩の行軍の果てに部隊がたどりついたのは、ソ満国境の街黒河であった。

この行軍の間、ソ連軍との戦いで犠牲になった日本兵の亡き骸が荒野に野ざらしとなっているのを数多く見たが、監視兵がついていたので埋葬することもできず、無念の思いを抱きながら通り過ぎなければならなかった。このときの無念さは、今も胸の中に残っており、敗戦の惨めさをつくづくと思い知らされた。

黒河から船に乗って日本に帰るものと思っていたが、船が着いたところは、ソ連領のブラゴエシチェンスクで、そこからさらに貨物列車に乗せられて北へ北

へと送られた。十日余りで着いた所はチタ区のアルハラ駅であった。「東京ダモイ、ダモイ」と移動の度にだまされ続けて、着いたのはシベリア鉄道の中程の「アルハラ収容所」であった。抑留されること二年、その間の過酷な強制労働、極端に粗悪な食事、体感温度零下五十度という極寒、加えて劣悪な居住施設による不衛生状態などから数多くの戦友が帰らぬ人となった。私は、義勇隊時代に鍛えた体力と環境に対する適応力によって、幸いにもこの苦境を乗り切ることができたが、シベリアでの捕虜生活の苦しみは今も脳裏から離れることがない。

昭和二十二年十月、ウラジオストクから日本の引き揚船「開拓丸」に乗って舞鶴港に引揚げることができた。しかし、日本本土にも、銃を手にしたアメリカ兵が方々に立っていた。シベリアでの屈辱が再び本土でよみがえってきて、日本の将来はどうなるのかと敗戦国日本の将来に思いをいたし胸が痛んだ。

それでも、早く家に帰りたい思いで、心は高岡へとはやるが、汽車は鈍行の各駅停車であった。やっとの

思いで、八年振りに郷里高岡の町を見て驚いたことには、途中で、見た各地に比べて、あまりにも昔と変わっていないことであった。

第二の故郷、満州に「王道染土」を建設するための町作りに携わった経験から、生まれ故郷高岡の復興には、まず建築が大切だと考えて、大工の見習いになった。修行を始めて五年十年と、いつの間にか二十年がたつて何とか一人前の大工になることができた。これも、満州での義勇隊での訓練を通じて、幹部や先輩から不撓不屈の精神をたたき込まれたたまものと深く感謝している。

昭和五十八年、高岡地域建築組合長を務めさせていただき、そして、技能を持って地域産業の発展と後継者の育成に寄与した功績により、高岡市長より建築技能功労賞をいただいた。

平成三年十月二十八日、神利義勇隊開拓団の団長であり、戦後も神利会の会長であった川原豊作先生が、九十四歳の天寿を全うして他界された。葬儀に際し、会員の皆さんから、私に弔辞を述べるよう要請があつ

たので、僭越ではあったが、神利会を代表して、昭和十五年に内原訓練所に入所以来、常に先生が我々に諭された、「正義が減びるなら、人間はこの世に住む必要はない。」との言葉を引用させていただき、謹んでお悔やみを申し上げたのである。

戦後五十余年、私の千支ちえの兔年を迎え、自分史を作りたいと思っていた矢先に、「平和の礎」の原稿を募集するという話があった。ちょうどいい機会と思い、記憶の薄れないうちに我が人生の記録を整理し、自分史に代えて「平和の礎」に残すことができれば、やがてこの本に目を通すであろうより多くの子や孫に、平和の尊さや戦争の悲惨さを伝えることがかない、彼ら自身の、二十一世紀を雄々しく生きていくための心の支えになれば幸いと思つて書いた。

最後に、満州・シベリアのみならず南方の各地において、お国のために尊い生命をささげられた方々をしのび、戦争が二度と起こらないことを願いながら、この一文をささげ、ご冥福をお祈りする次第である。